The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	世紀転換期のプラハ モダン都市の空間とその文学的表象
Author(s)	三谷, 研爾
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49418
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【49】

氏　　名	三谷研爾（みたにけんじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２３４１　号
学位授与年月日	平成20年４月１日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**世紀転換期のプラハ　モダン都市の空間とその文学的表象**
論文審査委員	（主査） 教　授　林　　正則 （副査） 教　授　柏木　隆雄　　教　授　市川　　明

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、19世紀末から1930年代にいたるまで、現在のチェコ共和国の首都プラハを舞台に展開されたドイツ語モダニズム文学を対象とし、とりわけ1910年前後に大量に書かれたプラハ小説にみられる都市空間の近代化と文学テクストとの関連を分析したものである。全体は序章、3章に分かれた本論、図版出典一覧・参考文献一覧、および地図から構成され、AB変型判159ページ（400字詰原稿用紙にして約600枚）に及ぶ。

序章は、〈プラハのドイツ語文学〉研究史を概観する。1960年代、「プラハの春」のさなか、ゴルトシュテュカーによって提唱された研究プログラムは、1930年代の表現主義論争の論議を継承するものだった。そこから、初期マルクスの思想をふまえた社会経済史的な枠組が設定された。1970年代に入るとマグリスが、フロイト主義的な世代論と中欧都市論とを組み合わせた、新たな方向を提示した。本論文では、中欧モダニズムの全体像をとらえるマグリスの議論を受け入れつつ、プラハ固有の歴史的・社会的条件の解明をめざしたゴルトシュテュカーの

立場を組み替え、個別のテクストに即して都市空間の文学的表象を考察するアプローチがとられる。

第１章では、自由主義ナショナリズムが広く浸透していたプラハ・ドイツ社会の知的状況が、さまざまな言説から検討される。ドイツ系市民はボヘミアの民族紛争のなかで、多彩な社交サークルを組織し、「ドイツ文化」の護持による「生き残り」を図った。だが〈プラハのドイツ語文学〉の担い手となる息子世代の知識人からみれば、親世代の「文化」イデオロギーは、文化の貧困化の原因そのものであった。彼らは、同時代のモダニズム的動向を摂取し、チェコ社会との交流を模索した。プラハにおける「文化」をめぐるこうした対立は、世紀転換期のドイツ語圏に広く観察された「社会的モデルネ」と「美的モデルネ」の拮抗のひとつの姿と評価されている。

第２章では、20 世紀初頭にプラハで取り組まれた大規模再開発事業たる「衛生化措置」の評価問題を補助線として、都市空間の近代化にたいするネガティヴな思考態度とプラハ小説との関連が明らかにされている。ここでは、プラハの都市空間の歴史的形成過程から「衛生化措置」の意味が再確認される一方、近代化にたいする批判的な視線から生まれたマイリンクの『ゴーレム』、レッピンの『ゼヴェリーン闇をいく』が、都市のトポグラフィーに即して検討される。「魔都プラハ」の表象の形成にあずかった両作品は従来、唯美主義的なデカダンス小説と評価されてきたが、本論文はその背後に、近代都市を支配している衛生主義や合理主義をシニカルにとらえる、強烈な対抗文化的思考をみる。〈プラハのドイツ語文学〉の幻想性に富んだテクストは、社会の近代化プロセスの否定函数的な表現になっているかぎりで、中欧の芸術的モダニズムの一端を担うものと解釈される。

第３章では、近代化のもたらす人・モノの流動化現象の表現が、〈交通〉のメタファーを手がかりに検証されている。キッシュの『娘飼い』では、性の商品化とナショナルな対立を超える経済的ダイナミズムとの結合が、ブロートの『チェコ人の女中』では、性愛によるナショナルな対立の宥和とあわせ、アメリカ移民のテーマ化が指摘される。広義の〈交通〉にかかわるこれらの主題は、移民先アメリカでの社会的不適応を扱ったカフカの『失踪者』にも連なる。カフカの場合、シカゴ学派社会学の成果とも呼応する、近代都市の社会空間への洞察がプラハ経験と融合し、さらに不安定な物語叙法ともあいまって、独自の都市小説へと結実している。最後に、第２章および第３章のテクスト分析で明らかになった、世紀転換期のプラハにおける都市経験の諸相が示しているのは、ジンメルの指摘する「客体的文化」と「主体的文化」との軋轢の具体的な姿であると結論づけられている。

論文審査の結果の要旨

「近代は都市の経験とその表象のディテールにおいてもっとも豊かな実質を湛えている」と論者は述べる。ゆえに「近代を語るとは、とりもなおさず都市を語ることだ」という基本的立場から、都市文学の歴史においてとりわけ異彩を放つ〈プラハのドイツ語文学〉、即ち 20 世紀転換期プラハで主にユダヤ系ドイツ語作家によって担われたモダニズム文学、とりわけ 1910 年前後に多く書かれた都市小説と、それらが孕んでいた多様な問題の布置から、中欧の境界都市プラハを中心に渦巻いていた近代の位相を照射したきわめて斬新な、かつ刺激的な論考である。

論者は「プラハのドイツ語文学」が形成された時期が、まさしく多民族都市プラハの都市空間が再編され、モダン都市へと生まれ変わる過程と重なり合うという並行関係に注目し、プラハのクロノロジー（歴史）とトポロジー（地誌）が交錯する地点に照準を合わせ、マイリンク『ゴーレム』、レッピン『ゼヴェリーン闇を行く』、キッシュ『娘飼い』、ブロート『チェコ人の女中』、カフカ『失踪者』の 5 つの小説テクストをマクロな視点とミクロな視点を綯い合わせながら詳細に読み解き、文学的言説と非文学的言説とがせめぎあう場面の実態を鮮やかに浮かび上がらせていく。チェコ人、ドイツ人、ユダヤ人の言語的・宗教的・経済的な三つ巴の葛藤、世代間のイデオロギー的対立状況、プラハ都市空間の近代化（衛生化措置事業）、社会的流動化をかたどる〈交通〉のメタファーなど、錯綜した歴史的・文化的な布置を精確に測定しつつ、犀利に解析してゆく手並みは見事と言うほかない。

本論文の持つ圧倒的な説得力は、理論的な枠組みの堅牢さ、同時代史への周到な目配り、歴史的な資料の博捜とその実証的な検証によることは言うまでもない。特筆すべきは、論者自身が繰り返し足を運び、論者の身体感覚で捉えられたプラハの実像が、論述をきわめて精彩に富んだものとしている点であろう。

ただし、モダニズム的性格がもっとも強い『失踪者』については、テクストとテクスト外の世界とを関連づける分析がやや単線的に思われる。結論部を支える物語叙法の問題も、作品分析のなかでさらに詳細に展開されていれば、文学論としていっそう豊かなものになったであろう。とはいえ、〈テクストとしての都市〉を読み解く〈メタテクストとしての都市文学〉という視点、歴史的・社会的なプロセスと文学テクストの相関関係を言語テクストにとどまらず地図や統計、都市景観の図像を駆使してダイナミックに記述してゆく方法などは、今後ドイツ文学史の再編成にとどまらず、文学研究のあり方そのものの再考に繋がる重い意味を持つものであり、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。